

静 中・静 高 会 報 9
関 東 同 窓 会



T. NAKAMURA

巻頭のことば

新しい会員を迎えて

会長 宮澤 次郎

美しい新緑の季節、みなさまの御健勝を心からお慶び申し上げます。

私たちの関東同窓会は、みなさまの御協力で年々発展し、今年も盛大に総会を行う運びとなりました。

それは御同慶の至りに存じます。殊に昨年来、母校を卒業して進学する新しい会員との連絡経路が開かれて、今年も二百名の諸君を迎える事になったのは、まことに心強く喜ばしい事です。

さて、新しい会員を迎えて、これとさらに感じますのは、母校を巣立ち親元を離れて生活環境の変化に適應しなければならぬ若い諸君にこそ同窓会の存在が大きな意味を持つ、又その様に努めなければならぬまいという事です。

元来同窓の先輩と後輩の間からは、赤の他人とは違ってお互いの胸には同じ母校の伝統の血が流れ

て居るのであり、然も未だ社会的関係に拘束されない学生と先輩の間ではお互いに客観的に公平な見方ができると言えるでしょう。

又、先輩は実社会の経験者であり、現在の社会を担っている実践者であつて、各分野の実態を最もよく把握している人々であるわけ

です。従つて、学生諸君が学園内の人間関係に閉じ籠らず外界に視野を拡げて実社会に生きる道を学ぶ為には、同窓会は最も有効であり、又、安全な場であると考えてよいと思ひます。

若い諸君を迎えて、私たちは諸君を心から歓迎すると共に、諸君が進んで同窓会活動に参加して先輩との交流を盛にし、且、同窓会に若い活力を吹き込まれる様切望する次第です。

西田太公望先生の

歌集『流曳』に寄せて

芹澤 正憲(43回)

思い出もかすむ半世期前、静中で親しく薫陶を受けたよわい喜寿になんなんとする西田先生から、このたび上梓された歌集『流曳』の贈呈を受けた。

流曳とはさまよう意味で、先生が齢傾いた人生行路の終焉に、いちは墳墓の地ときめていた静岡の地を突如離れねばならぬという家庭事情が勃発した。

その人生革命ともいうべき転機に異境の地をさまよひながら、くさぐさの思い出を詠じた歌を一本にまとめたものである。

処女歌集といつても、近頃はやりの歌人グループのもち廻り刊行や一夜漬けのインスタント歌集ではない。先生には、静中での同僚本告先生と共に国民文学の同人としての長いキャリアーの歌歴があるからである。

そのキャリアーからくるいぶし銀のような詠歌は、理智の円座に端座しての折目正しさと素朴さのにじみでた手法ながら、素材の把

握ぶり、デッサンの描き方、リアルな表現ぶり、旋律の流しかたなど心憎いばかりの洗練さがある。とりわけ驚嘆するのは新万葉、新古今の流れを酌むみやび言葉や語彙の豊饒な蘊蓄と、その活殺自在な駆使ぶりである。

また韻文定型詩という古典歌道の約束ごとをしかと踏まえながらも、モチーフやスタイルは近代センスのカテゴリーに大胆に踏み込んでの激測としたポーズ！ しかもそれらが背のびや銜いや厚化粧をいささかも感じさせないのは、作者の端正もさることながら、円熟した作歌技量のしからしむものといわねばなるまい。

もちろん老いの筆さびのことゆえ、若人には心情的なセンチメンタルジャーニイやメランコリーへの陥穽ぶりなどに世代の落差を感じさせるものもある。またアマチュアには字余りなどの新しいスタイルやなじまぬ枕言葉やみやび読みなどに、いささかの戸迷

いもある。しかし、それらを手づくりの職人芸で完璧に帳消しにしているのは、ただただ『お見事！』と三嘆せざるを得ない。さすがは正統を誇る古典文学のメッカ神宮皇学館育ち！と私なりに感佩したことである。

巻をとしてじつと耳を澄ませば、さまざまな楽器のもつ音色の無限の複合ともいえる妙なる交響楽がチロチロささやいてくるようなこれら一連の名品！ 牧歌あり賛歌あり悲歌、輓歌と次々にくり広げられる繚乱の花園！

私一人で観賞してはもったいないような気持ちに駆られて、そのうち白眉のものをピックアップしていささかの短歌オニチ的な解説を加えて同窓諸兄におすそ分けしよう、と、あえて禿筆を架した次第である。

× ×

故郷と思ほゆるまで住み古りし
静岡岡出でて老の漂泊

傷心のいづくに果てる命かも
妻ともないて吉野山来れり

退職の記念の時計わが細き
腕に勤勉に十五年止らず

大正の末期から終戦まで二十余年の歳月をひたすら静中教師として、もてるエネルギーと情熱のすべてを燃やしつくした先生には、浅間山の松嶺も安倍川のせせらぎも、思い出の山であり思い出の川であった。できうればこの地を墳墓の地としたかったことだろう。

しかし先生の行く手には中京のご子息と余生を共にせねばならぬという、老の宿命が立ちまはだかつていた。半世紀に渉るくさぐさの思ひ出のうちにも、ともかく平おん無事の人生をささえてくれた第二のふるさと静岡との訣別に、先生はさぞや煩悶と懊悩の幾夜かを送ったことだろう。か細き腕にコチコチ時を刻む退職記念の時計！ それを見るたびうづく静岡中教師時代へのセンチメンタルジャーニイ！

一連の詠歌は去りがちの静岡と静中への別離のファンファーレのように囁々と余韻を曳いている。

アカシヤの下葉の色づきはや散れり

今年も二度の家移りせし

静岡の春の便りの路のとう

今年もたびぬかなしわが友

流転と漂泊に傷心の先生は、ともすれば異境の地からつる望郷の思いをたかぶらせていた。しかし待てば海路の日よりで、やがて流曳にも終止符がうたれて、ご子息の下には念願の老の安息所がしつらえられた。

わが老を養う小さき二階やの
棟木のさつきの空に上りぬ

というように『ついの棲み家』が築かれたわけである。先生お目出とう！ よかったですネ！ たとえ囁のおぼしまには遠くとも、つつましやかな老夫妻が隠れ世をしのぶには、このついの棲家も詠歌どおり『宮灯ゆらぐ夢の菜館』であったことだろう。

はげしかりし今朝の雨はれて
野の果て低く三角の小牧山見ゆ

トルコ玉のような青空に屹立する雨後の小牧山を新居から遠望しての詠歌。晴れてさやかな先生の瞳！

叫びつつ花投げ入れつふたたび
は
見るなき顔に涙をそそぐ

六人兄弟のついの一人となりにけり
若葉の山に姉を送りて

これが最後と紋切型の言いひて
喜寿の二人別れ春雨

わびしともさびしともなく老残の
酒酌むひとり夏は来向う

人間は他人の死に何度か立会うことによっておのれの死のイメージをととのえてゆくものだ、といわれるが、老いても人間は煩悩の申し子。

例えば世界の恋人シャルル・ボワイエの老残の姿を想起するなら『これ以上生きて生きる苦しみを味いたくない』と自らのいのちを絶った残酷なインパクト。また想起するならベートーヴェンのハイリゲンシュタットの遺書、耳疾と難聴に失望して、『秋の木の葉が枯れるように余の希望も枯れはてた！』と人生を精算しようとしたが、あやうく思い止まって雄叫び高くチャレンジしたのが、あの不滅の第5交響楽の『英雄』であったことは、洽く知られているとお

だらけ。うつ病もその一つ。個人差はあるが高齢者には例外ない病と精神科医は指摘する。

老境にしのび寄るやる瀬ない孤独と寂寥感！ これら一連の作品は本歌集中の圧巻であり、もの狂おしいまでの嗚咽と嘘啼が生々しくにじみでている。ようやく古希を迎えて周辺に計報しきりの小生にもひとごととは思われず鬼気せまる詠歌である。

学校より帰るそこそこ食パンを
銜えて一年坊主柿の木よじのぼる

前をゆく若き二人のつと寄りて
短きキスすセーヌ川沿い

パンくわえ柿の木をましろのよう
に渡り歩く愛孫に目を細める、
じいバカチャンリンぶりと、オヤ
オヤこれは名だたる謹言居士の花
園に咲いたヌード的な狂い咲き！

いとほじみ飲まぬというを酒餓
鬼に
せつかれ夕べ酒買いゆく

腹のため今宵は飲まじと決めし
酒
荒ぶる酒鬼に一本許す

大方の羅漢笑ますに横向きて
頼ふくらすもありて笑ましき

老境に入っていささかの酒をた
しなみつつ人生のペーソスを追求
して余すところのない先生。その
哀歎の谷間のどこにこんなユーモ
ラスな一面がひそんでいたのか。

新感覚派のパロデー歌と錯覚さ
せる詠歌！ しかしそれでいいで
しょう。森林の思考に砂漠の思
考。そのレパートリーにこそ明暗
にたえた人間西田重雄のパーソナ
リティがある。裸形のうちに、も
からだのぬくもりと脈うつ静脈の
ふくれさえ感する手練の名品。

ハイジャックぐさり刺す手はな
きか
対策いづれ常識を出でず

神明に誓ひてという壮語も
政治家の修飾民信ずるや

無頼の世相とその対策の無能さ
に激しい憤りを投げつける筆誅居
士ぶりと、政治家どものスキャン
ダルの連発や『コップの中のあら
し』の茶番劇にあいそをつかし、
なにをしゃべろうが聞く耳はもた
んワイ、いづれ選挙目あてのキレ

イゴトにきままっているからな、とソッポを向きつばなしのノンポリ先生！

無抵抗説きし聖の跡継ぎし
ガンジー首相隣国を撃つ

痩せやせて何か食ひおり難民の
腹ふくれたる裸形の子供

ある日ふと無人の街となる幻想
汚染の川が挟む低地帯

とつ国のころなきわざに、炬火の前のローソクのような抵抗を試みるエモーショナルなヒューマニスト！ またこよなく愛している山河の汚染にたまりかね、激しく警鐘を乱打する老いの熱血！ 一連の詠歌は世相への照準もおおむねマトを射ており、神秘的箱を開くバンドーラのカギとして、やっぱり先生ならではの、思わずシヤッポを脱ぎたくなる詠歌。

便乗値上げ不当利得の数十億
指摘されて社長らのふくれつら

静中時代諸先生の講議などウワノソラで、学校とはメダカのように楽しく群れて遊ぶところ、とばかり思っていた小生には、いまだ

人からモノを習うという機能が欠けている。いまここに金儲けとは全く無縁な先生からこんなアイクチのような歌をつきつけられると正に無条件コウフクです！ いまだに悪貨は良貨を駆逐するというグレッシャム法則を信奉し、利潤追求にアクセクしているむかしの『メダカの学校の優等生』への頂門の一針であり、半世紀ぶりの慈味あふるる教訓としてつつましく拝聴させて頂く。

生垣のつづくこのたに有明の
ついの住処か覚園寺道

門入れば本草植えこむ垣の下
チロチロとつくばい落つ

みんなみの海風受けているさや
に
椿を咲かす日蓮の寺

こぞの青葉の頃拙宅に来駕された先生と地衣の白くまつわりついた宝篋印塔や苔むす五輪の塔を撫しながら、鎌倉のハイキングコースを彷徨したことがあった。百八ヤグラから下りてきた覚園寺道に

は、先生がマブタの師と呼ぶ静岡ゆかりの蒲原有明のついの棲み家がある。有明は花袋、藤村、独歩

などと共に黎明期の詩壇に活躍した抒情詩人である。『春去る夕べ』を口吟さみながら、ついの棲家の門口に立ちつ、去りかねての先生！

自然に従え

◎北は南に勝つ

北ときけば、なにか寒い冬の雪国などを連想し、陰うつな感じが頭の中をかすめるものです。

それに反し南といえば「君よ知るや南の国」ではないけれど、なんとなく情熱的で、若さや明るい感じを抱きがちです。だから北よりも南の方が住みよくて有利で、すべての点で南は北より勝れているような気がします。

ところが、北と南が戦争をするところ、不思議なことに北が南より強くて勝つのです。戦争の歴史を調べてみますと、南が北に負けています。

最近のベトナムの動乱でも、北ベトナムが南に勝ち、ナポレオンもヒットラーも北には負け、アメ

ようやく宵闇が迫って大塔のボンポリにチラホラ残りの桜が散りかけていた。一連の作はその折りの春愁賦です。

杉山栄一(47回)

リカの南北戦争も、日本の南朝と北朝の戦いも、みんな北が勝っています。第二次世界大戦でも、日本は南の島々へ南下して、いったんは勝ったのに、島の北側へ上陸した米軍のために敗れた例が多いと聞いています

北には南より強い何か恐ろしい神秘な力があるのです。

北に敗れるということから、負けることを「敗北」という熟語が生れ、現在でも使われています。

ただ単に、負けるという熟語に対し、なぜ「北」などという方位の文字が用いられるのか、その理由がこれでおわかりになったと思います。

◎北は目上の場所

今から四五〇〇年も前、中国の

殷や周時代の古代人たちは、北極星が動かないことを知ってから、北極星を中心とする部分が天の中心だと考え、ここを中宮と呼び、北極星を神霊化し、最高の天神が居所だと致しました。

北極星は北辰とも呼ばれ、その回りを一年の周期で廻る北斗七星は動く星とし、この動かない星の北極星を「天帝」とし、動く星の北斗七星を「乗車」と見なし、天帝に対し輔弼の役割をする間柄と考えました。

北極星、北斗七星を中心とする北の位置は、神の場所、帝王、殿様、社長、父親、目上の場所として重要視してきました。

天皇を守るから「北面の武士」殿様の奥方だから「北の方」、

「北政所」と申したのです。

これに対し南は、臣下、家来、部下、子供、目下の場所として考えられ扱われてきました。

従って北の方が南より強いということになるわけです。

北極星と北斗七星を神格化した神さまが妙見菩薩です。星座でいえば大熊座、大熊座は小熊座に対して母親の立場にあるので、母親の星とされ、子宝をお願いしたり安産を祈願したりします。

静岡市井の宮の妙見さまがこれです。東京では有楽町の「そごう百貨店」の屋上に妙見菩薩の絵姿が祭られています。

◎宇宙の気は南から北へ

京都の御所は北にあり、南の朱雀門から入って北へ上ります。江戸城も南から入り北の丸が本丸に当ります。

家康の死後、家光の時代に家康を東照公といって、神として祭るには何処の土地がよいかの評定されました。神となると北が第一条

件です。江戸から北に当る聖地、日光が選ばれたのです。

北にのぼることを「北上」といい、南にくだることを「南下」という熟語が使われていますが、「北下」とか「南上」という言葉はありません。

「北上川」はあっても、「南上川」はありません。

このように宇宙の気（エネルギーと解して下さい）は南から北へ流れると、古代人は考えました。北上するのです。だから北は南よ

りも有利なのです。

この考え方が仏教界に採り入れられました。

即ち、人間は魂と肉体とでできている。魂は父親によって入れられ、南で生れる。生れた時は赤色だが北に向って縦に進んでゆき、北に行って死ぬ時は黒色になる。

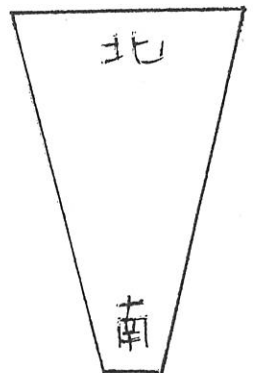
肉体は母親に作られ、東で生れる。生れた時は青色だが西に向って横に進み、年をとるにつれて白髪になる。西に行って死ぬ時は白色になる。そこで西を西方浄土と定めました。また魂が迷わず北に進めるように、人が死ぬと北枕にするのです。

葬式には魂の黒色と肉体の白色からとった黒と白の幕を用い、黒と白が弔意を表現することは、ここから生れた「しきたり」なのである。

◎北を背にして商談せよ

北のもつ不思議さについて、もう一つ申しあげます。

地図を眺めて下さい。地球上の北アメリカ大陸も、南アメリカ大陸も、アフリカ大陸も、ユーラシア大陸もみな北が広くて高く、南が狭くて低いのです。逆三角形の形をしています。



これが占いの地相学や家相学の基礎になっています。こういう地相は吉相なのです。

ここで皆さんに申しあげたいことは……

人と商談したり対談する場合に、北を背にして南に客（相手）を坐らせて話をすると、宇宙の気は南から北に流れるという理から有利に事が展開することになるわけです。商売にご利用下さい。「君子は南面す」なんていう言葉もこれからできたのです。

自然に従った姿だからです。

社長は北に部屋をとり、社員は南に配置し、社長室でも北を背にして坐ることが大切です。

応接室の椅子もこのように配置した方がベターです。ここにオフィス方位学が生れたのです。

日本の国は天照大神を奉斎していた神道です。

北極星を神格化し、これに陰陽・五行、木火土金水、説を入れたこの思想は、白鳳時代に天武天皇のご尽力で、伊勢神宮に巧みに採り入れられました。

内宮を北極星に外宮を北斗七星にして、星が巡り合う重要な日が内宮、外宮の祭日になって今日まで続いているそうです。

◎北に祈る

古代人は何事につけ願をこめて北極星を祈ったのです。

この星に願をかけ成功した人に千葉周作があります。

「われを日本一の剣豪になさしめ給え……」と、父子で北辰に祈願した熱心な妙見信仰者です。

立派な剣客に成功したので、北辰の二字を流派に名づけ、北辰一刀流の道場をお玉ヶ池に開きました。これは幕末の話です。

北に関し皆さんのご参考までに神棚、仏壇、お墓について付け加えます……

・神棚を家庭で祭る場合は、北を背にして南に向けることが理想的です。

・仏壇を部屋に置く場合には、西を背にして（西方浄土）東に向け

るのが理想的です。

・お墓を作る場合には、西を背にして東に向けるか、北を背にして南に向けることが吉相です。

これは墓相学の第一条件です。

大自然の神は人間の生き方を、だまて、いろいろ教示しています。ところが私たちがそれに気づかないのです。

自然の姿から学び、自然に従がい、自然の中に生きてゆくことが一ばん大事なことでないでしょうか……

これまで述べたこの思想は四五〇年も前の東洋人の考え方で、

中国占星術算命学の教えです。算命学は中国歴代の王朝に伝わってきました。

元来、中国人の処生術であったのですが、これが戦術に利用され、あらゆる占いの原理になり、宗教界で応用されたのです。東洋哲学の根本思想です。

(註) 参考文献

。算命学宗家高尾義政講演集
。学習院大学講師吉野裕子著
「隠された神々」

編集委員記

杉山栄一氏は、かつて民謡等について、蘊蓄を傾けられた大変面白いお話を、この会報にお寄せ下さっておりますが、更に、運命学についても静中卒業の頃から姓名判断、印相、九星、数霊、算命学等を御研究になっており、この方面にも大変御造詣の深い方と承っております。

東部ニューギニア終戦記

— その日戦場は静かだった —

三好 由三郎 (43回)

ております。

赤ちゃんの命名や改名、あるいは社名、商品名、店名などのネーミング、また、結婚相談、事業相談、共同者の相性、方位などについて各方面の人々から相談を受けて居られる由、私共同窓生の相談には特別のお取扱いをして下さいとのことです。

すでに三十有余年を経過しても戦争の経験は私の人生にとって最大のものであり、今もなお折にふれ、生々しく想い起こされる。

私は昭和十八年一月二度目の召集で同年四月から終戦まで東部ニューギニアに転戦し、二十一年一月同地から内地に帰還した。赤道直下、南半球の秘境の国とも原始の社会ともいわれる東部ニューギニアで、内地との連絡は絶え、兵器・食糧・医療品・被服等一切の補給もなく、囲碁の捨て石のように、全く見放された部隊の終戦の模様は、この会報の記事としては

ふさわしくないかも知れないが、書いて見ることとした。

昭和二十年八月十五日はいつものように朝からよく晴れた日だった。私の部隊は海岸から凡そ五十キロも奥地の山の中で連日敵と相対峙していた。当時の東部ニューギニアの全軍がこの地域に集結して、敵の攻撃を受けて最後の戦闘を続けていたのである。前日まで

は前面の敵からの銃砲撃や、他の地区の砲声や敵機の爆撃音などが終日していたのに、当日はそれが全く聞えて来ない。ということは敵が全く攻撃をしていないという

ことだ。この地区のどの部隊にも機関銃もなく、各人の持っている小銃弾も大分以前に最期のものとして渡され、残っているのも僅かのはずだったのだ。こちらから仕掛けるようなことはまずなく、敵が攻撃しない限り戦場に銃砲声は全くしないわけだった。

山の中の戦場はとみに静寂で、耳が空ろになったような、引き込まれるような静けさだった。上陸以来はじめての静かな日だった。いく度か身を秘めて敵陣地をのぞき見るが、全く何もわからずいぶかしげな終日だった。

八月十六日、今日も戦場は全く静寂だった。何回となく敵陣地をのぞいて見るが、攻撃を仕掛けてくる様子は全くないばかりか、敵の砲兵陣地では遮蔽物が取り除かれ、砲の移動が行われていた。敵陣地後方の高地ではライトプレーンが海岸方面から飛来し、また飛び去ることを何回となく繰り返し返していた。ライトプレーンの爆音が妙にのんびり聞えていた。

この日はじめて土人が持参した紙片が歩哨から届けられた、英語のようではあるが、濠洲軍の軍隊用語であろうか、よくわからないが「戦争が終わったので指揮官は濠洲軍まで出て来るように」との

意味のことが書いてあるようだった。

海岸線にいた頃、大小各様の伝單がさかんに撒かれた。内地の空襲の様子など写真入りで南太平洋新聞という新聞二頁大の伝單で知った。敵の謀略とはいえ、戦争の見通しについては何か考えさせるものがあったし、当面の戦闘の状況からこれが結論であるならばの期待も内心ないことはなかった。上層部からは何の指示もない。まだ戦争中だというのに敵の行動は何なのか、不安でいっぱいだった。

八月十七日、この日も敵から攻撃は全くなかった。私の部隊は総員僅か十一名となってしまうていた。とても独立工兵連隊として形をなすものではなかった。わが部隊ばかりでなく、この地区の各部隊も同じような状況だった。こうした場合、その地区にある各部隊の指揮は各部隊のうちの最上級將校がとることとなる。

今日、地区部隊の將校全員の集合があった。十五日以降の敵の行動は謀略と判断し、引続き戦争体制をとるものとし、各部隊の行動を慎重にし、連絡と情報を密にすることが指示された。

十九年の夏、全軍が北部海岸線

を西部ニューギニアのホルランジ

ヤに向けて転進中、アイタベに上陸した濠州軍に進路を阻まれ、全員が最後の攻撃を挑んだが、敵の陸海空のおびただしい重火器の前に僅か数門の小型砲を持つのみではいかんとも難く、ひとたまりもなく敗れてしまった。残存部隊は山中に待避して集結し、状況を見

ることとなった。アイタベの奥地は、東部ニューギニア第二の大河セビックの上流、山岳高原地帯で土人の居住も多く、また農園も多いところだ。私の部隊は十二月にこの地区に移動し、土人の協力で食糧も確保でき、二月までは平静に過したが、敵の攻撃は海岸線方面の残留部隊に向けられていた。

海岸線方面の部隊が逐次この地区に集結するとともに、敵の攻撃がこの地区に向けられ、私の部隊も次々と奥地の山中へと移動せざるを得なくなり、五月になってからは彼我の距離は極めて接近し、毎日交戦が続けられるようになっていた。敵の攻撃も激しさを加え、左右の他の地区から聞える砲声も日一日と大きくなって行き、時には後方に砲声が聞えるようになり、敵の包囲網が狭められていくことが推測でき、いよいよ最期が近づいたという思いが段々強くな

ってきた。

兵員も武器も弾薬も持たない軍隊が、敵の攻撃は避けられない、逃げる場所はない、敵に降服もしたくないとなれば、一合戦して全滅するか、分散して山中に隠れるか、それまで少しでも長く抵抗して、その時期を遅らせるためにはどうして戦ったのか。

地区部隊の位置はすべて谷間のジャングルにおき、毎日第一線につく者、陣地構築に当たる者、歩哨・監視に当たる者、食糧を徴集する者などそれぞれの任務が定められた。

第一線陣地は高地に起伏斜面を利用して、僅か数個の壕を掘って構築される。そしてこの陣地は毎日後方に移動するわけである。朝になると敵が前進して来る。敵の尖兵が概ね二百メートル位まで接近するのを待って、壕の中から長い棒で傍らの樹の枝を叩いて、あるいは大声をあげて、時には小銃を数発射撃する。敵が警戒して前進を停止すると、壕の人員は直ちに後方の低地に移動して危険地域を離脱する。この陣地に対して敵は機関銃・迫撃砲などで徹底した攻撃を行ない、完全に相手を排除したことを確認したうえで、はじめて敵部隊が前進してくる。わが

方は敵の前進状況を見て、翌日の戦闘のための陣地を構築する。

こうした戦闘を毎日毎日繰り返して敵の前進を遅らせることが敵に対する唯一の反撃であった。この反撃がいつまで続けられるのかわからないが、最期の日が近づいている思いは誰も同じだった。

日本軍隊には降伏はないのだというようなことは思いはしなかったが、自ら降伏する考えはなかった。戦線での降伏は死と同様だ。さすれば全滅するか自ら命を絶つか、山の中に隠れて生きのび、いつかわからない終戦に賭けるか、いずれを選ぶか自ら決めねばならない時期だった。部隊の誰もが第三の方法をとる考えだった。第一次大戦のあと数十年後、太平洋の島から生還した例があったという話が大いに励ましであった。残された小銃と弾薬マラリヤの薬などを大切にしておかなければと話し合ったりした。先年、横井さんの生還の例は、こうした可能性を立証したものとして特に感激が深かった。

されたらどうなるのか不安は増すばかりだ。

八月二十日地区部隊の将校全員の集合が行われた。そこで終戦の詔勅が伝達された。詔勅は方面軍司令部に残された唯一の無線機が昨日シンガポールの日本語放送を受信したもののことであった。

ジャングルの間に洩れる僅かな太陽の光線、狭い斜面の場所に凡そ二十名ほどの将校が起立して、指揮官の読み上げる詔勅に聴き入った。伝達が終わったが、激する者もなく、言葉を発する者もなく、沈み入るような沈黙がしばし続いた。むしろ空ろな放心状態だったのだろう。

二年余にわたり、最悪の条件のもとに戦ってきた者にとって、この詔勅を受けた心中はまことに感無量というより他はなかった。敗戦の実感にはほど遠く、戦争が終わったという事実は何んとしても感動だった。

部隊に戻って、聴き取りで書かれた詔勅が伝達された。文句も正確ではなかったが、全員また感動をもってこれに聴き入った。

即日、指示に基づいて部隊は現在地近くに宿舎を定めることになった。ジャングルを出て遮蔽物も防備も考えることなく、実に二年

四カ月ぶりに太陽を全身に受け、手足を思い切り伸ばし、大地に仰向けに寝転がって歓声をあげた。

東部ニューギニアでの私の部隊の終戦はこうした状況でしたが、その後のことをもう少し書かしていただきます。

現地ではこうして終戦を迎えたが、それから内地に帰還するまでが容易ではなかった。私の部隊はその年の十月に海岸線の降伏線を通り、無人島に収容されて捕虜の扱いを受けることとなったが、海岸線へ移動を開始するまでの約二カ月の期間は、現在地にそのまま滞在することとなったため、食糧の入手が困難となり、敗れた今となつては土人の協力は全く得られず、雑草でしのぐほどのひどい状態に陥入ってしまった。このため各部隊とも次第に病人が増加してきたが、医療品は全くなく、まことに困難な事態だった。

また、海岸線へ移動は、その間約二千メートルの山を越えて、健康者で八日、傷病者では十五日を要する行程だった。すでに私も栄養失調が甚しく、二十日をかけて辛うじてこの脱出に成功したが、他の部隊では病気のため移動ができない者、あるいはそのため自決した者の話も伝わってきた。内地

帰還を前にして、この口惜しさなどその心情を思いやり、胸を痛めたことだった。

無人島収容後にあっても、二十一年一月帰還船の来るまでの約三カ月の間に、捕虜としてささやかながら食糧の給与があり、また若干の医療品の支給がありながら、病死者の数は三千人にも及んだとのことであつた。いかに困窮の中に衰弱した体力で持ち耐えてきていたか、なんとも憐れとしか言えないのではないことだった。

最後に、私の部隊は豊橋で編成された独立工兵連隊で、編成時の総員千名だった。十八年四月、東部ニューギニア北部海岸のほぼ中央部ハンサに上陸、南海派遣軍の指揮下に入った。同年十一月には約五百キロ東方のフィッシュハーエンの敵上陸部隊の攻撃に参加してラエに在る孤立部隊の脱出を援助し、その後、西方に転進中、敵上陸部隊に進路を遮断され、やむなく四十余日にわたるサラワゲ山中の迂回転進を行ない、その後全軍が西部ニューギニアに転進行動をとることになり、再び十九年八月アイタベで敵上陸部隊に阻止されるところとなり、その後の行動は先に記したとおりであつた。

全行程は凡そ千五百キロ以上に

も及び、すべて徒歩での行動だった。なお私は主計将校だったが、主計の業務は、文明社会で経済行為が行われる場所で戦争が順調に行れるときには必要であるうが、原始社会の中で、敗戦で転進を

イルカと人間(3)

36回大村秀雄氏の著書から

編集委員 月見里 得知郎

イルカの話は前二回にわたって古代地中海でのイルカと人間の交流からヘレニズム、ルネッサンスの文化に於けるイルカ、そして英国のイルカ彫刻に及び、そこに発見された中国の建築模型の屋根の上のシャチホコに至りました。

今回は日本のお城のシャチホコの原型がギリシャ・ローマのイルカに求められるというお話です。

ここで当然、二千三百年昔、亜欧両大陸を打通してインド・アフガニスタンまでヘレニズムを移植したアレキサンダー大王東征の壮大な話と、漢の武帝の西征や張騫の西域物語りとがシルクロードのロマンを高く高く述べられている訳ですが、紙面の関係もあり、この稿ではシャチホコとイルカの間

重ね、物資の補給も全くなかったら全く用をなさないものだった。

東部ニューギニアの戦争記録を作ったみたいとは思ってきいてるが、現在まで作れないようではやはり無理かも知れない。

係に絞って紹介することとしました。

また、中央アジア・シベリアから出土するスキタイ文化の黄金製品にあるグリフォン及び正倉院御物にある海獣葡萄鏡の海獣とギリシャローマのイルカとの関係についても興味深い問題を提起されているが、同様割愛させて頂きました。

シャチホコ

日本の古い建物の屋根の上に鴟尾(しび)というものがある。これは沓形(くつがた)ともいわれる通り、沓を立てた形をしていて、お城のシャチホコは違いますが、これら沓形やシャチホコの原型はギリシャ・ローマのイルカと考え

るのであるが、ではそれがどのようなルートを通っていつやって来たか、これが次の問題である。ルネッサンスの時代にローマに使節として派遣された天正少年使節によってもたらされた可能性もなきにしも非ずであるが、ここでは、これよりもっと前の時代に遡って考えてみたいのである。

それはアレキサンダー大王の東征によってバクトリア(現在のアフガニスタン)に多数の新たな都市が造られ、ここにヘレニズム文化が持ち込まれ、しかも、それから間もなく漢の武帝が西方に勢力を伸ばして、その使節がバクトリアに達しているからである。そして、この時代に中国の絹織物が遠くローマにまで送られ、逆にヘレニズム文化が中国に輸入されたからであり、バクトリアが東西文化交流の接点であったからである。ここではまず順序としてアレキサンダー大王の東征から話を始めよう。

アレキサンダー大王の東征

アレキサンダー大王の東征で、ここで特記しなければならぬことは、エジプトにアレキサンドリアを造ったことと、バクトリアに

多くのギリシャの都市を造ったことである。アレキサンドリアについては多くのことが知られているが、バクトリアのギリシャの都市については、まだあまり多くのことが知られていない。エジプトのアレキサンドリアは、彼の死後学問や文芸が大いに栄えて、ヘレニズム文化の中心都市となる。バクトリアに造られた都市はシルクロードにより東西文明交流の接点となり、又インドとの交流も行なわれる。ここを通して仏教が中国や朝鮮にも渡るのであるが、地中海沿岸に栄えたヘレニズム文化も中国や朝鮮にも及び、その終着点が正倉院だとされている。中国からは主として絹が西域に送られ、その終点はローマである。

考古学的にはバクトリアは重要な地であつて、古くからフランスが発掘を行なっているが、現在ではイタリア、ソ連、英国、アメリカ、ドイツなどの調査隊が入り込んで発掘を行なっている。日本からは、京都大学の中央アジア調査隊が十年以上前から参加している。特にフランスの調査隊はバクトリアの都市を発掘し、ギリシャ風の彫像や柱頭が出土している由である。私の最も関心のあるギリシャ・ローマのイルカもここを通

って中国に渡ったと考えるのであるが、これらの出土品の中に、このようなイルカがあるかどうかははまだ知らない。たとえ既に発掘されていたとしても、イルカはあくまでもワキ役であるから、問題にされないのかも知れない。アレキサンダー大王が、少年ダイオニシオスとイルカの話を書いて、それは海神ポセイドンがダイオニシオスを特に愛した証拠であるとして、この少年をバビロンの寺院に祭つてあるポセイドンに司える高僧に任命した話も伝わっているし、ヘレニズム文化が、大王の死後バクトリアにも入つて来ているのであるから、ギリシャ・ローマのイルカその波に乗ってバクトリアにまで来たことは確かであると思う。或いはまだどこかの地下で二〇〇〇年の眠りを続けているのかも知れない。

中国とヘレニズム

地中海沿岸に栄えたヘレニズム文化が定期的に中国に渡つて来たのは、漢の時代（紀元前二〇二年～紀元二二〇年）である。一般にヘレニズム文化といわれるのは、紀元前三〇〇年から同五〇年までの間であるから、ヘレニズム文化は非常に早く中国に伝わったこ

ととなる。このルートを正しく開いたのは、西ではアレキサンダー大王、東では漢の武帝ということとなる。前漢の時代に中央集権制度を確立し、積極策を講じてその領土が秦帝国以上に拡大したのは武帝（紀元前一四一～同八七）の時代である。その領土は南は今日のベトナムまで、東は朝鮮半島にも及んだが、ここで特筆すべきことは、西方に大きく延びたことである。当時、漢の軍隊は中央アジアの兵と戦い、バクトリアまで達している。そしてこの時代に、西方に延びるキャラバンの通路が安全となり、中央アジアばかりでなく、西欧のヘレニズム時代の産物の品物も西方諸国に送られた。

紀元一世紀頃漢の勢力は一時的に衰えるが、その後復活し、中央アジアばかりでなく、地中海沿岸諸国との交易も再開される。ただし、この時代には陸上ルートばかりでなく、トンキン湾を介して海上の輸送も開始される。中国の絹が地中海沿岸に運ばれヘレニズム時代の西欧の文化が中国に入ってくる。

中国の鵝尾

中国の湖月楼の大屋根の上に、

日本のシャチホコと同じ物が乗っていることは既に述べた。中国ではこれを虬・蜃又は鵝尾という。このようなことを調べるのは私にとっては難事業であるが、幸なことにフランク・ホウレイが調べてくれている。彼は英国人であるが、長く京都に滞在し、日本の古文書を調べて、日本の鯨と捕鯨という名著を出版した。彼はシャチホコに関連して二カ所で述べている。原本は何れも高承（高丞）の事物紀原である。高承は元豊の時代の人で、その活躍期は一〇七八～一〇八五年とされている。フランク・ホウレイは最初貝原益軒（一六四〇～一七一四）の大和本草（寛永五年、一七〇八年版）から引用したが、後になって鵜飼信之（一六一五～一六六四）が一六六四年に京都で出版したものがあることに気づき、両者を比較したところ、貝原益軒は唯単に原文を要約したのに過ぎないとして、この部分を書き加えているのである。ここではこの両者とも重要であると考えるので、まず貝原益軒のものから始めよう。

「唐の會要という書物によれば、海中に虬という魚がいる。その尾は鵝に似ている。これで浪を激しく掻き廻せば雨が降る。火災を防ぐため、屋根の上にその像を作った。今日ではその像を瓦で作る。蘇頌の演義では蜃は海獣である。蜃尾は水の精であつて、火災から護る能力がある。堂殿の上に置くべきである。今日では蜃の代りに鵝という字が多く使われている。又俗に鵝吻といわれる。墨客揮犀では鵝としてゐる」

次に鵜飼信之の編の事物紀原に移ろう。これは鵝尾の起源に関して最も重要なものであるから、少し長い全文を次に掲げる。

「唐會要によれば、漢の栢梁殿が火災にあつた。越の巫の言うところによれば、海中に虬という魚があり、その尾は鵝に似ている。これで浪を激しく掻き廻せば直ちに雨が降る。火災を防ぐため、その像を屋根の上に置くようになった。王叔弼穀子（王叔は八三一年頃の人、炙穀子はあだ名）曰く栢梁が火災にあつた時、巫はその術をとり上げるように進言し、鵝魚の尾を火災に対する魔よけとして宮殿の屋根の上に置いた。今では瓦でその形を作ることが行なわれている。蘇頌の演義では、漢が栢梁殿を作った。ある者が言ったことは、蜃尾は水の精であつてよく火災を防ぐことができるから、堂殿の上に置くべきである。今日では鵝という字が多く使われる。顔之推も鵝と書いている。劉孝孫（六三二年頃）は事始の中で蜃尾という字を使っている。俗に鵝吻ともいわれるが、鵝鳶に似ていることから来ている。その後は鵝と書かれている。王子年（王嘉三九〇年頃死亡）は拾遺記の中で、鯨（紀元前二〇〇〇年頃の人とされている。大禹の父）は洪水を乾そうとして失敗し、自らは羽淵で溺死、玄魚となった。海人は羽山の麓に玄魚のために祠を作り、四季にお祭をした。ある時この海に長さ百丈の（魚？）が見えかくれした。そのものは水を噴出した。浪を打てば必ず雨が降った。漢書によれば越の巫が鵝魚の尾を請うて火災を防がれたが、今日の鵝尾はこの魚の尾である。王嘉は晋の人で晋は漢とあまり距つてはいない。鵝という字はその時代に既に使われていたから、蘇頌の説に賛成はできない。呉處厚（一〇九三年頃死亡）の青箱雜記には、海中に虬という魚がいる。その尾は鵝に似ている。浪を噴出すれば雨が降る。漢の栢梁臺は炎上した。越の巫は火災からのがれる方法を建議した。建章宮の建築に際しては、火災からまもるために鵝魚の像を屋根の上に乗せた。これが今

日の鵑吻である」

このように貝原益軒のものよりは遙かに詳しい。ただし両者の間には若干の差がある。貝原益軒の方では鰐鰓は虬は海獣だとしているが、鵑鰓信之編のものでは単に水之精とあるだけで海獣とはなっていない。墨客揮犀も引用されていないから、鵑という字は出てこない。ここに引用されているものは総て魚である。あるいは編者の鵑鰓信之は魚と信じていたのかも知れない。これに対して貝原益軒は鵑尾をシャホコと見ているから、海獣という言葉も出てくるのであろう。この点については後でさらに述べる。ここではまず、虬とか蛭とか鵑について考えてみよう。ただし、この三つは同じものであるから、これから後は鵑という字で代表させよう。

鵑が魚であるか海獣であるかは別として、まずその形について考えてみよう。この動物の尾が鵑又は鵑鰓に似ているということである。本来、鵑とはフクロウミズクである。つまり、鳥である。鵑はトビであって、これも鳥である。この動物の尾が鳥に似ているということは、鳥の尾に似ていると解釈もできよう。要は、この動物の尾は鳥の尾に似ていることで

あろう。この動物をイルカとすれば、鳥の尾に似ているということ、尾が水平についていることを意味する。ギリシャ・ローマのイルカは、既に述べた通り、三つ又の特殊な尾であって、しかも、ギザギザがある。これをフクロウの尾と見立てたものと思う。

次にこの動物の能力であるが、この点はいろいろの人の意見が一致している。海面を激しく掻き廻せば雨が降ることである。鰐鰓の演義では、鵑尾は水の精である。

この二つを組み合わせて考えれば、これは正に海の神様(或いは水の神様でもよい)ポセイドンそのものである。前にも書いた通りギリシャ・ローマのイルカの尾は普通のイルカとは異なつて特殊な三つ又の尾である。なぜこのようになったのか。それはおそらくポセイドンの手に持った三つ又のヤスを図案化したものであつて、これによつてイルカそのものが、このような能力を持つようになったと理解することができる。

ギリシャ・ローマのイルカは、このようにして水の精となり、ヨーロッパの本国では噴水の装飾に使われ、中国に渡つてからは、水の精として、火災予防のため、大建築の屋根の上に乗せられたので

あろう。ただここで問題なのは、

中国では鵑尾をイルカとは見ていなかった点である。鰐鰓は海獣なりとしているが、他の多くは魚として点である。中国の長江(楊子江)にはヨウスコウカワイルカがいる。このイルカは二〇〇〇年以上の昔から中国の人には知られている。中国ではこれを鰐鰓

(二)又は白鰐鰓(Bar)としている。したがつて漢の時代からイルカは中国で知られていたのであるが、ギリシャ・ローマのイルカが白鰐鰓の仲間であるとは気がつかなかったであらう。それはギリシャ・ローマのイルカがあまりにも図案化されていて、中には鱗を持ったものもあるから海獣説もあつたが、むしろ魚と考へて、体には鱗をつけ、尾は魚形になったものと思う。いづれにしても漢の武帝の時代に柏梁臺が焼け、その後は建てた建章宮の新築に際して鵑尾が大屋根の上に火災から護るために乗せられたことは事実である。したがつて日本のシャホコの起源は太初二年(紀元前一〇三年)であることは事実であらう。

ただここに一つの問題がある。それは王子年という玄魚である。玄魚とは鯨が溺死して魚と化したその魚のことであるが、この玄魚

と長さ百丈の(魚?)との関係である。長さ百丈の(魚?)は水を空中に吐き出し、海面を叩けば必ず雨が降る。ところが奇妙なことに、鯨は鯢と同じ意味であり、鯢は鯨を意味する。したがつて玄魚も長さ百丈の魚も同一のものであつて、鯢の類だと考へることもできる。鯢は紀元前二〇〇〇年以上

も前の人とされているから、鯢が溺死したのはずいぶん古い話であるが、死んで直ちに玄魚となり、直ちに水を噴出したのかどうかは明らかでない。後世の人の作り話であるかも知れない。この魚の尾が鵑尾であるが、鵑尾の持っている超能力に関する話は、他から移入されたと考へることもできる。羽山がどこにあるかは不明であるが、建章宮の建築に際して鵑尾を屋根の上に乗せることを進言したのは越の巫である。越とは今日の広東のことである。漢の時代にはシルクロードによる陸路のコースの外に、船による南廻りのルートもあつた。漢の武帝の時代にもこのルートを通つて東西の両文化が交流したことも考へられる。さらにシルクロードと同様、これ以前にも、現実にこのような海上のルートが存在していたのかも知れない。武帝の時代にそれが大いに振

興されたと解釈するのが妥当であらう。この船によるルートの中国側の起点が広東である。

水を吹き上げたり、波を立てて雨を降らせたり、あるいは水の精などという言葉から、われわれがまず連想することは、海の神様ポセイドンとそのお伴のイルカのことである。この時代の航海は難事業であつたに違いない。天候まかせ風まかせであり、一度時化に遭えば命とりとなる。頼むものは神様だけである。ギリシャの海の神様ポセイドンの話が中国に伝わりギリシャ・ローマの独特の形をしたイルカが中国に渡つたのも、船による南廻りのコースであつたと考へるのが一番妥当であるかも知れない。それが玄魚となり鵑尾となったのであろう。

このように解釈すれば、越の巫という言葉も理解することができ、越は今日の広東であり、ここが西域に通ずる海上ルートの起点であつたからである。巫とはまじない師か祈祷師の類であらう。この人たちがギリシャ神話に端を発するイルカ物語を受け入れ、建章宮の新築に際して、柏梁臺の二の舞をしないように、おまじないとして、この不思議な動物を大屋根の上に乗せることを建議したので

あろう。これが鵞尾の起源であり、この鵞尾が後に日本にも伝わってシャチホコとなったのである。

日本の鵞尾と シャチホコ

中国の鵞尾が日本に伝わったのは唐の時代であろう。この時代に中国に使した遣唐使やそれに随行した留学生などが、最新知識を得て帰国し、又多くの書物や珍奇な品物を日本に持ち帰った。これらの品物の中には、西域から来たもの又は西域の影響を受けたものも多い。これらは正倉院に収められ

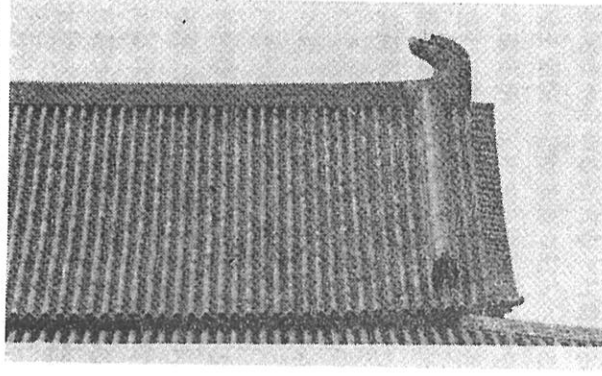


図12 芝増上寺の鵞尾

図13 魚の尾形の鵞尾



て宝物となっているが、このような問題は私の専門外のことである。ここで問題にするのは鵞尾だけである。

中国の鵞尾が日本に渡って来たのは六世紀頃だといわれる。この時代に建てられた法隆寺の玉蟲厨子や奈良の唐招提寺金堂の屋根に鵞尾がみえている。ただここで問題なのは、日本の鵞尾は中国の鵞尾と名称は全く同じであるが、形が違ふということである。日本の鵞尾は杓形ともいわれる通り、昔の大宮人の穿いていた杓に似ている。奈良の大仏殿の大屋根の上にあるものもそうであるし、東京では芝の増上寺の屋根の上のものもこれである(図12)。ただし広辞

苑によれば、鵞尾は宮殿、仏殿など大建築の大棟の両端に取りつける魚尾形の飾りとして図13に示した図が示されている。しかしこれはどうみても魚の尾ではない。鳥の羽のようなものがついている。これは鵞という魚がフクロウ又はトビ(鵞鷹)に似ているというところから来たものである。鵞尾は別名「鵞の尾」として、これを、「とびのお」と読ませているから、鵞の本来の意味はトビと解釈していたのであろう。杓形は図12に示した鵞尾をさらに簡略化したものであり、これでは全然動物という概念は出て来ない。ただし、図13の鵞尾の外縁のギザギザはまだ残っている。いずれにしても日本の鵞尾は魚の尾であったり杓形であったりするのであるが、どうしてこうなったのか、そこら辺の事情はわからない。ただ考えられることは、中国における鵞尾は仏教とは全然関係はないが、日本へは仏教と同じ時代に入ってきて、まず取り上げられたのが仏教関係の大建築であったことである。日本の建築は木造で、最もこわいのが火災である。火災から守ってくれるものが鵞尾である。大屋根の上に鵞尾を乗せろ、こう考えるのは当然である。

ただこの場合問題なのは、鵞尾という言葉だけ伝わって来たのかあるいはそれがどのような動物であるか、その像も伝わって来ているのかどうかという問題である。唐の時代に中国に行った人も多かったと思うし、向うからこちらにいろいろな物品も運ばれたのであるから、おそらく鵞尾の像や図も持ち込まれたものと思う。何れにしても最初にこれが使われたのが仏教関係の建築物であるから、海獣にしても魚にしても、明らかにそれとわかるような像は、屋根の上に乗せることにはばかったのではなからうか。

鵞尾が堂々とそのままの形で大屋根の上に乗せられるようになったのは、室町時代の前期頃城郭の形態が出来上がった時から始まったとされている。現在国宝に指定されているお城の中で犬山城は日本最古のものであり、その天守閣は天文六年(一五三七)に造営されたものであるが、その大屋根の上にはシャチホコがちゃんと乗っている(図14)。

お城の場合には、魚であっても海獣であっても忌み嫌うことはない。むしろこの動物の怪奇な顔、逞しい刺のあるヒレなどは敵に対する威嚇の意味もあり、城主の尊

図14 犬山城の天守閣



厳を示す象徴でもある(図15・16)。このようなことから盛んに用いられ、殊に織田信長が天正四年(一五七六)に築いた安土城以後、大阪城、伏見城などでは金瓦も用いられたから、鵞尾も多分金張りとなっていたと想像されている。それが名古屋城(一六〇〇)となつて、遂に金鯨となったのである。

次の問題は、どうして鵞尾がシャチホコとなったかである。はっきりしたことはわからないが、本朝食鑑(一六九五)には次のような記載がある。

鯨の一種に鰐斬(シャチキリ)ともいわれる鰐(シャチ)があ

る。このものは小さくて長さは一丈(一〇尺)を越さない。その嘴は鉾のようである。頭以外は鰭は鉾のようであり、銅で鑄造したこのものの像を、城楼の上に、その両端に向い合わせて置く。これが何物であるかはっきりしない。同名異物であろうか、数十の鰭が鰭の廻りに集まって、鰭の頬や顎の辺りを衝く。その声は海を通して聞える。しばらくして鰭は口を開く。小さな鰭は口の中に入って鰭の舌の根を噛みきる。この舌を争って喰いつくす。それ



図15 名古屋城のシャチホコ-1

が終ると去って行く。鰭は遂に死んでしまふ。これを鰭斬という。漁人はたまにこのような鰭を獲ることがある。以上の通りであるが、ここに書かれていた鰭はシャチに間違いはない。ただ体長が一丈というのは小さいし、嘴が鉾のようだというのもおかしい。シャチは逆戟ともいわれるが、それは脊ビレの形から来ている。ただこの文章からみると、この時代にはお城の屋根の上の鰭尾を鰭と言って、もう鰭尾とは言わないようである。ただしお城の屋根の上のシャチと現実には海にいるシャチとは同名異物かと言っているが、それは鰭が竜のようだと書いている通り、現実のシャチとは異なっているからである

う。

本朝食鑑より少し後に出了た貝原益軒の大和本草(一七〇八)では鰭尾と書いてシャチホコと読ませ、伊勢では黒トシバウ、九州ではタカマツ、能登では沖の神主というとしている。これからみると鰭尾をシャチホコと同定したのは貝原益軒であるように思う。シャチホコは鰭の外に、鰭、又千矛、鯨鉾とも書かれるが鰭志(一七五八)では次のように書いてある。

沙加未打漢語倒戟之謂也植鰭在中身而極大尖長朝後身身相對猶倒戟也故名焉爾又名矢牙知布孤これは、サカマタは漢語の倒戟と同じ意味である。脊ビレは体の

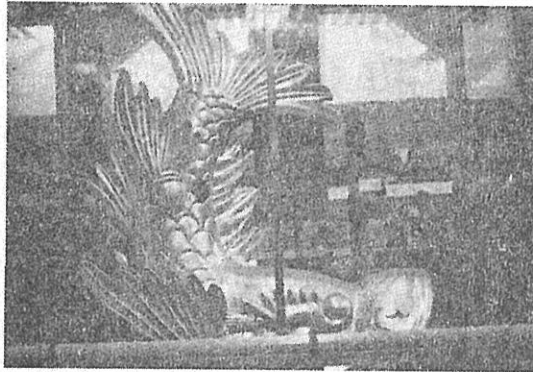


図16 名古屋城のシャチホコ-2

中央にあって、極めて大きく、長く尖っていて、後向きである。そのためサカマタといわれる。シャチホコともいわれる、という意味であろう。つまり脊ビレが戟(ホコ)に似ているが、それが後向きになっているからサカマタと名づけられたものである。この表現はシャチの特徴をよく示している。

それではどうして鰭尾をシャチホコと当てはめたのか。これが次の問題である。鰭尾が水を吹き上げたり、海面を激しく叩いて雨を降らせたりする超能力を持っていることは明らかである。空中に水を噴き上げる動物は鯨である。鯨の中で最も活発な、あるいは狂暴な動物はシャチである。この二つのことから、貝原益軒が鰭尾をシャチと同定したのであるかと考える。或いは年代的にみて、もう少し前の時代の本草学者であったのかも知れない。

鰭尾をシャチと同定したのは、当らずといえども遠からずである。ギリシャ・ローマのイルカはもととはマイルカとされている。今から約四〇〇〇年前のクレタ島クノッソスの宮殿の壁画では比較的正しく描かれていたが、時代が経つにつれて段々と変形し、

ヘレニズムの時代には尾ヒレが三つ又となり、顔も変形して、イルカというよりは竜に似たような形となり、これが中国に伝わって鰭尾となり、さらに日本に来てシャチホコとなった。これが私の考えであるが、次の問題は魚か海獣かという問題である。ギリシャのアリストテレスはイルカが胎生動物であること、空気を呼吸することなどを知っており、かつ、その寿命は二十五年以上であること、それは漁夫たちがイルカの尾ヒレを切りとって放してやり、それで年齢がわかったこと等も記している(鯨研通信一一五号)。アレキサンダー大王は幼少の頃アリストテレスの教えを受けているから、おそらくイルカの講義も聞いたことと思う。中国の文獻にも「蜃は海獣也」とあるから、そう考えていた人もあったろうし、逆に、これが蜃という動物は中国産のものではなくてギリシャ・ローマから伝わってきた動物であるとする一つの証拠であると考えることもできる。

日本では古くから鯨は魚の一種であると考えられていたから、鰭尾が中国から渡来して来た当初はこの動物は魚なりとして図12に示したような鰭尾となったが、シャチホコとなってお城の大屋根の上

に乗せられるようになると、魚ではなくて海獣と考えるようになったものと思う。寺島良安の和漢三才図会(一七一二)では「殿脊之獣」となっているし、貝原益軒(一六四〇～一七一四)も唐會要を引用するに当って「蜚海獣也」の部分も伝えている。貝原益軒はさらに鵺尾と書いて、これをシャチホコと読ませているから、少なくともシャチホコは海獣であると考えていたものと思う。

名古屋城のシャチホコは今日では金鯢と書いてあるが、明治時代又はそれ以前には鯢の字よりも鰐の字の方が普通であったように思う。図16に示した図には次のように書いてある。

尾張国名古屋城天守之金鯢
慶長年間加藤清正造之明治四年
辛未名古屋藩ヨリ之ヲ官ニ納ム
全體金ヲ以テ包ミ眼球并齒ハ銀
ニシテ瞳ハ赤銅ヲ以テ造ル
高サ八尺七寸 尾ノ開キ五尺
四寸 胴ノ周リ七尺三寸 胸
鰭ノ開キ四尺一寸 腹鰭ノ開
キ二尺五寸 眼ノ径リ一尺
頭ノ高サ三尺 鼻ノ幅二尺六
寸

明治二年(一八八九)に出版された藤川三溪の水産図解にはシャチとして鰐と鯢の二字を当てて

いる。蜚の字を使っている所から考えると、この時代にはお城の大屋根の上のシャチホコはイルカの仲間のシャチであるという考え方が定着していたようである。しかもその起源を辿って行けば、漢の時代の蜚にまで遡ることができると考えていたものと思う。ただ、

その蜚が実はギリシャ・ローマのイルカにその起源があるとは考えではないなかった。本書ではまだ証拠は不十分ながら、やっとそこまですりつけたように思う。この点については皆さんの御批判を仰ぎたいと思う。

東京四三会創立の功労者

市野誠二郎君を悼む

嶋 田 富 治(43回)

去る一月、我等が同窓、市野誠二郎君が永眠した。病名は脾臓癌である。蓋し、現代の医学水準では恢復は覚束ないであろう。御遺族に対しては真に御気の毒な次第であるが致し方がない。

同君は東京四三会の生みの親であると共に、亦育ての親でもあった。同会が今日在るのは偏に同君の労苦の賜物である。大の功労者である。同君の訃報に接して當時を回想し、同君との出会いと会創立の経緯を少し語らせて頂こう。私が市野君と戦後面会したのは

敗戦の疵痕が未だ癒えず生々しく残っていた昭和二十二年の春だったと思う。私の丸の内の勤務先も空襲でやられて近所の焼け残りの所に移転し、狭い所にごしやごしやしていた時である。突如同君の来訪を受けた。同君がどうして私がかこにいることを知り、又何故私を訪ねて来たのか、今だに謎であるが、全くの驚異であった。同君とは静中卒後相会う機会がなくなり、何処で、何をしておられるのか、皆目知らなかった。二十年振りでの面会であった。先ずお互

いの無事を祝し合い、面会を喜んだ。その時、同君は多く語らず、又過去に付ては話すのを欲しない様であったが、話の片鱗から、直前には職業軍人として戦争に従事していたことが臆げ乍ら判った。

私の記憶に誤りがなければ、同君は東京からの転校生であった。多分関東大震災で東京の家が焼け郷里の静岡興津に帰省し、転校して来たのだと思う。私と知り合いになったのは、その時同クラスとなったのか、それともその翌年クラス編成替の時一緒になったのか今では定かでない。同君は興津から通学していたので、当時の言葉で云えば「東の汽車通」で、これに対し私は学校の近所に住んでいた近傍組であるので、学校以外遊んだ記憶はない。従って放課後行を共にした事もなく、在学中は特に昵懇という間柄ではなかった。然し同君は名の示す通り真摯な性格の男で、人柄は田舎で他人を裏切る様なことはなく、信頼するに値する男であることが判っていたので心の隔てなく交際していた。それが、卒業後はお互い行く道が異なり、住居も相隔たり、何時の間にか音信不通となり、氣に懸り乍らも今次戦争に際会し、一切が不明となっていたのである。そ

鈴 与 株 式 会 社

取締役会長 鈴木 与 平(44回)

清水市入船町3丁目12

TEL (0543) 53-3111(大代表)

トッパン・ムーア株式会社

取締役社長 宮 澤 次 郎(42回)

東京都千代田区神田駿河台1-6

TEL (295) 2411(大代表)

れであるからこの面会の感激は亦一入であった。

以後時々訪ねて来たが、前歴が前歴であるので、当時の困難な時局を乗切るのには容易なことではなかった模様であった。

それから二、三年後だと言うが今度上野駅の近くに家具店を開業したので宜敷頼むと言って来た。

私は全く驚いた。商売とは縁のない前歴である上に、彼の縁辺には家具関係の仕事をやっている人がいない。どうして家具屋を思い付いたのか今だに疑問であるが、随分冒險であると思った。所謂軍服を脱いで前垂を懸けた訳で、「士族の商法」失敗しなければよいがと、それを心配していた。幸い、

店は彼の誠実な性格と重厚な商法で着々と伸び、それに物資不足の時局も幸し、遂に家具製造工場を持つ迄に到った。一応の成功を収めたのである。

同君の仕事が軌道に乗って来た一日、訪ねて来た同君は唐突にクラス会を開催しようではないかと相談を持ちかけて来た。戦後の混乱は一応収まったとは言うものの、インフレは進行し、生活は容易ではない時である。それだからこそ同窓相集り、苦しい時を生き抜いて来た者共が、お互いの無事を祝

し合い、皆が手を取り合って鼓舞激励し、希望をもって困難な時局を乗り切っていくのではないかと、との趣旨であった。私はその趣旨には全面的に賛成し、協力を惜しむものではないが、どうやって同窓の所在を探し、連絡をとるかと言うことである。これは大問題である。同窓生の何人かは、確かに東京に居住していたであろう。それは仄聞していた。然し、今次の戦争に依って消息が一切不明になっているのである。同君にも妙案はない模様で、兎に角何とかしようということ、全く雲を掴む様な事であるが、私は同君の熾烈な熱意に絆されて協力を誓った。

それから同君は多忙な家業の傍ら、東奔西走、幾多の苦難を重ね、同窓生の消息を探ね歩き、私も微力乍ら協力し、漸く十人前後の所在を確かめた。そして第一回の会合迄漕ぎつけたのは、最初の計画から三年後であった。

同君は会の創立から一切の報われない、困難な仕事に従事され、そのために払われた犠牲は並大抵ではない。同君はそれを少しも苦とせず、寧ろ皆が喜んで呉れることを楽しみとされていた。私は終始この同君の態度を見て頭の下がる思いであった。

同君のイニシアティブの下に発足した東京四三会は、その後、回を重ねるにつれて出席者が出席者を呼び、今では在京同窓の全員を網羅するに至っている。同会の今日の盛会は、全く同君の自己犠牲の下に成り立っていると言っても過言ではない。同君は会成立のお膳立をしたのにも拘らず、表に出ることを好まず、椽の下の方持ち的な態度で終始され、寧ろ功を誇ることを避けておられたことは、同君の美しい人格の反映であって何人も真似をすることが出来ないことである。そして、虚心坦懐なその態度に対しては敬服の外はない。

その後同君は家業の家具製造業を廃され、隠棲された。その間の事情に就いては詳にしない。同時に、東京四三会の幹事を辞任された。

その後、お互いの身辺の変動で相会う機会も少くなり、無事を確かめ合う程度になった。二、三年前身体を悪くされたことを伺っていたので、大事にする様言って置いたが、実際は一昨年からの入院を繰り返していたのであった。死後、未亡人からこのことを伺い、委細を知った。脾臓癌に冒されていたとは少しも知らなかった。聞

かされた時は暗澹たる気持であった。

今や幽明境を異にし、再び同君の温容に接することは出来ない。今にも雲が降りそうな薄ら寒い月半ば、同窓常任幹事西沢純三君と同君の告別式に参列し、同君を偲び、感慨を新たにされた次第である。

市野誠二郎君よ、安らかに眠れ！君が礎石を築いた東京四三会は益々発展して行くことであろう。

今茲に同君の霊に対し、東京四三会創立の功を称え、感謝の意を表すると共に、衷心から冥福を祈る次第である。

計 報

川 江 美 雄 (44回)

昨年の手術後、下半身全麻痺を伴いながら主治医も驚歎する程の強烈な精神力を発揮して闘病中であったが、三月一日死去。

川江さんは北大農学部出身、農林省を経て、土壌協会専務理事として永年その方面にご活躍中でした。三月五日阿佐谷協会にて日本土壌協会葬。

株式会社 講 談 社

取締役社長 野 間 省 一 (44回)

東京都文京区音羽 2-12-21

TEL (945) 1111 (大代表)

凸版印刷株式会社

東京都台東区台東 1-5-1

TEL (833) 2111 (大代表)

各 期 便 り

本号は寄稿が活発で、内容豊富なものとなりました。それに較べて、同期の便りが少く、その点、いささか寂寥の感をぬぐえません。それには、自分達は同期会を催していないので書くことがないとお考えの方が多いからではないかと思えます。

しかし、会報を開いた時、一番初めに頁を繰るのは同期の欄ではないでしょうか。そして、同期の便りに自分の同期のことが書いてない時ほど空しいものはないと思うのが共通した実感のようです。

そこで、こうお考えになつてはどうでしょうか。

同期の便り欄は、このスペースに関しては自分達の広場なのだと。そこは自由に、気儘に、自分達の同僚に語りかけ、ともに笑い、ともに懐しむ場にしようと思えることです。自分の近況でも友達の情報でもよいでしょう、それもないなら、この広場を写真や似顔や落書きで埋めたらどうですか。息子の啄を、娘の婿を募集するのもよいし、故物の交換を載せるのも一興です。

何でも、一言でも、我々同期は「どっこい生きてる」というところをこの欄をつかつて見せて下さい。

四 三 回

第七十九回四三会例会

去る二月九日新築なった三笑亭。磯谷幹事の挨拶で始まり、小の新館で午後二時より開かれた。杉幹事より四三会の現況報告あり。定刻にはぞくぞく懐かしい顔が現。「昨年の出島・勝間田・尾崎の三われ、東京からも吉江君が定刻前 君の逝去に続き、今年一月に東京

に幹事到着と共に玄関に姿を見せるなど出足は誠に快調であった。開会前に既に二十四名が参集し



昭55・2・9
四三会 (79回)
於 静岡三笑亭



の市野君、京都の田畑君を失った」悲報が告げられて、しばし物故友人の冥福を祈った。遠来の今井志郎君の首頭で乾盃、宴に入った。

われることになり、時局柄、元幕僚長の吉江誠一君から、今次スパイ事件の主犯宮永の父君は元少将で、吉江君も薫陶をうけたことの

た。

久々の顔合せとて、そこかしこで久瀧を叙す歓談が大いに弾んでいたが、各自の近況報告が順に行

ある謹厳温厚の武人で、当人も温厚な真面目人間であったとのこと、漏洩した機密は如何なるものか不明であるが、誠に申し訳ない次

合同酒精株式会社

取締役副社長 堀 豪 三 (44回)

東京都中央区銀座 6-2 合同ビル

TEL (571) 8 6 4 1 (大代表)

株式会社 東 電 社

取締役社長 岩 波 信 平 (42回)

東京都中央区日本橋 2-1-21

TEL (271) 2 7 0 1 (大代表)

第で、引責辞職した前陸幕長と共に深くお詫したいと深々と頭を下げられた。

加藤金治君は元中佐、四街道の砲兵学校教官の当時、宮永は中尉として加藤君の直屬部下であったという話までつけ加えられ、本人は目だたぬ真面目な男で、数年前までは年賀状も毎年寄こしていたが、加藤君の部隊が情報隊といわれていた事から、その後その方面の仕事に廻されたのであろうとの話があった。はからずも今回のスパイ事件が、四三会員とも多少どころか色々のかかわりがあり、現に、自衛隊勤務の山村忠雄君は謹慎して今回は残念乍ら欠席されてしまった。

続いて、芹沢正憲君のアメリカで迎えた古稀の祝の話を始めとして、今井・池谷・田崎・西沢の諸君の近況が終ったところで記念撮影、お互に白くなったり、光ったりしている頭を気にしながら、仲良くパチリ。一足遅れた北里良夫・柳沢保雄の両君がカメラに間に合わなかったのは残念であった。

関東組の八名に続いて静岡組の近況報告が順に進むにつれて、益々宴たけなわとなり、五十年前の十代の中学生に還って宴は尽きなかった。

夕刻まで時刻の経つのも忘れて名残りは惜しまれたが、遠来組の都合もあって今井君のあざやかなタクトで「岳南健児……」の校歌を合唱して閉会した。

昔ほどには酒量も進まず、まず健康第一という稀寿祝の例会ではあったが、口々に「実に楽しかった。又やろう」という声につつまれて、二十六名の老童が名残り惜しみつつ袂を煩つことの出来たのは大成功であった。

次回は第八〇回を迎える記念すべき会合となるので、稀寿祝を重ねて伊豆方面で一泊の計画で進める事になった。四三会員の多数の出席を希望する次第である。

当日の出席者は左記の通り。

今井志郎 池谷三郎 北里良夫
芹沢正憲 田崎茂雄 西沢純三
柳沢保雄 吉江誠一 以上関東
磯谷幸一郎 大石貢治 加藤金治
神谷俊郎 近藤伊佐男 小杉一
帯金鎮一 滝口亀太郎 永井景
原崎俊三 藤田金作 堀田利郎
松岡義平 松永清平 見原三郎
森下強三 八木友治 鷺巣恭一
以上静岡 (西沢純三)

四五回

第45期は昭和五年卒、今年がちょうど卒業50周年に当たるので、

その記念の同期会が、静岡在住の幹事たちの肝入りで三月二日静岡市の鷹匠会館で開かれた。50周年記念の集いということで多数の参加を期待して出かけたが、ぼちぼち老人に起りがちな故障者も出て来て「残念ながら欠席」という便りもかなりあり、出席者総数は三十数名、関東地区からは、青木、柏木、草野、竹下、田代、鈴木などが参加した。

会の初めに同期の物故者の慰霊をということで、未亡人をお招きし（鈴木要二君の未亡人ほか6名出席）浅間神社宮司の司祭でお祭りをを行い、一同敬虔な祈りを捧げた。慰霊祭の後、席をあらためて懇談会に移った。村松圭三君から前回以後の同期生の動静や恩師のその後について報告があり、その後、めいめいの来し方近況について話し合ったが、一別以来の友遠方より来るもあり、話に花が咲いて、お互いにむさぼるように久闊を癒し合う態であった。参院選も間近かで、同窓後輩の立候補予定者の関係の人が挨拶を述べる合の手も入ったりしたが、それぞれが五十数年前の中学生にかえって、時の経つのも忘れて楽しい集いを次の機会にもと、お互いの健康を祈念して散会した。（鈴木弥門）

四六回

先見の明のあった話

中学四年か五年の頃だったから昭和四年か五年だと思ふ。兎に角生意気な考え方が充満している頃である。国語の学科が大嫌いで、国文法等の話の聞くと、ヘドが出る位であった。お菓子と書いて、お、わしと振り仮名をすとか、てふてふと書いて、ちようちようと読ませる等の得意な講義を聞いていると馬鹿々々しくて、ねむ気をもようすどころでなく、義憤さえ感じてきた。全静中生徒のため、無駄な時間を取り除いてやろうかとさえ思ったものである。

ある日、極めてつまらないと考えられる校内規則が発表されて、何であつたか忘れたが一面白くなつたことだけを覚えてゐる。てふてふと書いてちようちようと読ませること等を職業としている連中の作つた規則である、と言つたような文章を作文に書いたのがイケなかつた。私は職員室に呼ばれて、かなり厳しく訓戒を受けた。学校から帰宅すると、一部始終を親父に説明したものである。一喝を喰う覚悟であつた。変人で通つた親父は意外にも叱るどころか、受け取りようによってはおほめの

新日本証券株式会社

取締役社長 大石 巖 (53回)

東京都中央区日本橋1-17-10
TEL (273) 2311 (大代表)

本田技研工業株式会社

川島 喜八郎 (52回)

東京都渋谷区神宮前6-27-8
TEL (499) 0111 (大代表)

言葉のようにも聞えた。

人間社会から隔絶されて、同じ事を五年も十年も繰返してやっていると病膏肓に入るといってな、お前達のような馬鹿者達を相手に一生を暮す先生は、常識を失って行くものだ、と言ったような話をしていた。

あれから何年後か。私が親父になって、私の息子が小学校の高学年になった。息子は先生の叱り方が不当で不公平であると言って先生の手に噛みついたそうである。私の親父のあのときの心境を思い出して、私は自分の息子を叱ってよいのかどうか判断がつかなかった。

お前達は、てふてふと書いて、ちようちようと読まなくてもよいから幸せだとか、お父さんには先見の明があったとか、何とか、トンチンカンな話をして、お茶を濁したものである。(阿部俊一)

五二回

上野の桜も散って、早や葉桜の季節。今年も五月には恒例の同期総会が静岡で開催される。静岡幹事よりの諸兄えのお報せの通り、我々の仲間から、昨年より今日迄に郷見君以下三君が相ついで不帰の客となつて了った。

郷君は一度も我々の会合に出た事がなかったが、十数年前、黒川君と勤務先え会いに行った事があったが、無類の酒好きだった事を想い出す。朝日奈君—ニックネーム早雲と言った方が早いかも知れないが—彼の著書「薩摩土手の研究」から静岡の薩摩土手・火屋の土手(子供の頃我々は「ひやん土手」と呼んでいた)の由来を興味深く読んだのは、つい此の間の事だ。黒川君は酔うと必ず藤圭子の「夢は夜開く」を歌って陶然としていた。寿命とは言い乍ら、我々にとっては聊かショック。心から御冥福をお祈りする。

さて関東近辺在住同期会の近況について報告しよう。

昨年九月十四日、苫米地君の設営で市ヶ谷会館で夕方から開催、静岡からも川野辺、香川、伊藤(恵)、村松の諸兄も駆けつけてくれて、在京十七名も加え二一名。

川島君(本田技研)の藍綬褒章授賞、その他一部の諸兄の昇格、栄転等々が披露された。今日の会合では、一昨年自社工場で大事故にあった相島君も元気で出席、目下片手が全く使えないが、リハビリ専念中の旨及皆さんよりのお見舞に対する感謝の挨拶があった事

を報告する。川島君の副社長退任は未だ早く惜しい気がするが藍綬は立派。その功績に心から御苦労様と言いたい。当夜は宴酣なわともなる頃、香川、関口両君のプロ顔負け?の名調子がマイクから流れ出し、皆一足飛びに昔の悪童の頃に戻って了った。次回は岩本、今井両君が幹事、秋頃の設営を楽しみにしている。

関東在住出席者。相島、綾部、岩本、今井、太田、川島、榎松、佐藤、坂本、関口、曾根、苫米地、新美、服部、松永、弓削、直原、ゴルフ会

昨年十月二十七日(土)関東方面でゴルフ同好会を開催すべく、坂本君の尽力により福島県棚倉田舎CCをリザーブして貰い、静岡を含み全メンバー二三名に案内したが、結局、参加者は坂本、川島、綾部、曾根、苫米地、直原の六名で、前日、白河迄電車で行き、クラブバスで棚倉温泉下車、そこがもうコースとなっている処だ。クラブハウス付設の豪華なレストハウスで明日のショットを夢見つ

一泊。当日は好天で、晩秋に拘らず暖かく、広々としたフェアウエーは我々を心から歓迎してくれている様だった。そう言えば、川島君は

我々のコンペは初参加と言う事となるが、さすが往年野球で鍛えただけあって、以前、此の会報で曾根君が紹介した「幻のロングヒッター」の異名通り仲々の飛ばし屋(もっとも我々が飛ばなさ過ぎる為か)で、ベスグロは彼のものだった。

何時ものベスグロ坂本君は、どうしたわけか不調で我々を喜ばせた。綾部君は相変わらず堅いゴルフ、残り三名は例の通り自分の年令に正直なスコアだ。川島君の提案で、これから毎年定期戦と言う事になったので一人でも多い参加を期待する。

五二期の諸兄!仕事、家族、健康状態、その他何んでも、ハガキで良いから近況をお報せ下さい。次の同期会で報告します。

西田豊馬君が調布市に在住の事が判ったので関東在住は三六名となった事を報告します。(直原澄衛)

五四回

柴田久夫君に ある日電話をして、会報の同期便りに五四季会の旧友紹介として同君を掲載したいと言ったら、小生宅に来るからとのことであつたので、一日、十条へ同君をお招きした。

川 根 銘 茶

三保乃園 山 菅 茶 店

山 菅 章 雄 (53回)
(村 松 正 七)

東京都港区南青山1-20-6

TEL 03-403-5760

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩 井 平一郎 (57回)

本 社 静 岡 市 国 吉 田 6 4 5

TEL 0542 (62) 1111 (代)

東 京 中央区京橋1-2越前屋ビル

TEL 03 (272) 4651 (代)

柴田久夫君で分らなくても、旧姓今井久夫君と言えば、ハハア彼のことかと思ひ出すだろう。

二十五年、西田太公望先生のお世話で、美人の誉高い柴田先生の御息女と結婚、柴田姓を名乗る。

この柴田先生も、タマネギの愛称で親しまれた習字の先生と申上げた方が分りが早いだろう。その奥さんともお気の毒に四十八年に死別され、五十年に再婚されたが、お嬢さん二人は嫁がれて、今は二人暮らしとの由。

東京へは、二十八年に出て来たが、教職に就いて早や四十年、停年にあと二年となった。静師の二部を出ると、はじめ、大里西に奉職した。一緒に静師へ進んだのは石川博君(戦病死)だけだった。

静中時代の思ひ出と言ったら、郷土研究会に入っていて、沼館、大沢、位野木の諸先生と、城趾の寸法をはかったり、図面作りの手伝いをしたり、井戸の深さや温度を調べたりしたことだった。そのせいか、学科では地理、歴史が好きだった。

小学校は一番町小学校で、同窓は安東、林、福田君等と、亡くなった三上、和田君等だった。生まれは安倍郡玉川村だったが、父親が教員だったので住所を転々とし

小生の工場の文選台の前で



た関係で一番町小学校出身ということになったのだろう。

兵役は横須賀海兵団で、教育期間後、長門の水兵となった。戦争の終り頃は葉山陸戦隊となり、石川大隊に所属して壕掘りばかりやらされていた。内地で終戦になったので、九月に復員して、また大里西へ舞い戻った。

学校も数多く移り変わった。大里西、田町、成城学園、横内、世田谷代田小、烏山、蘆花公園、調布野川小、府中二小、調布三小、狛江四小と変り、現在に至る。教頭を五年やってから四十九年校長に

なった。

専門は数学(算数)で、日本数学会に所属し、今年、大会がある。で募金係で東奔西走している。

苦しかったことは、物質的な点では、薄給で生計が立たず、止むなくバイトに家庭教師をやったりワーク・ブックを作ったりしてしのいだことだ。

精神的な面では、教頭時代、小学生が三階から落ち、その補償問題では苦労した。

その他、ボールをぶつけられて片目が失明した子の処理や警備員ストで泊り込みしたことなど思ひ出がある。

楽しいことといえば、昔の教え子から結婚式の案内をもらったときとか、不意に訪問を受けた時などだ。

趣味といえば、花いじりが好きで、学校にマリーゴールドとかパンピーなど作って楽しんでる。

最後に五四季会には出来るだけ協力することでしたので、東京の連絡は小生がやり、静岡との連絡は柴田君にお願いすることを約した。
(庵原悌次)

五五回

四月のはじめ、五五期の青木道

生君から関東同窓会の事務局に通のながきが届いた。

同窓会除名願について

小生昨年三月退職その後しばらく再就職していましたが、都合により本年度で引退しました。今後は余生を閑居して行く積りでおります。

就きましては種々お世話様に相成りましたが、昭和五十四年度三月をもって貴会から除名していただきたく、甚だ勝手ではありますがよろしくお願い申し上げます。

敬具

事務局では小生とも相談のうえご本人の希望どおり次回発行の名簿から同君を除くこととした。

千葉県の四街道町で隠棲の日を送られる同君の今後の明け暮れが静安ならんことを祈ってやまな
(相川富士雄)

五七回

昨年の十二月十四日、関東地区の忘年同期会を東京八重洲のおでんやで催した。安くて、くつろげるお座敷がよいという大方の意見で夏に続いておでんやを選んだ。集まる面々十七名。たあいのない話、懐旧談、だれかれの最近の消息に話がはずむ。いつも思うのだが、旧友と語るときは、緊張感が

新東京印刷株式会社

代表取締役 梶 原 由 三 (67回)

東京都中央区八丁堀 2-1-7

神鋼ビル

TEL 03-553-8981 (代表)

同窓会コンベンなど、ご相談ください。

伊豆大仁カントリークラブ 伊豆大仁開発株式会社

代表取締役 石 橋 正 秋

取締役支配人 安 田 正 弥 (66回)

静岡県田方郡大仁町浮橋字南松坂1198-1

TEL 0558-76-2401 (代表)

ないので、本当にリラックスしてしゃべれるので楽しい。この席で卒業三十七年目にして知ったことがある。狩野君の名前である。昭和十七年三月卒業時の名簿には、「準一」と印刷されていた。ところが、卒業以来始めて彼と会い、「準一」であることを思い知らされた。考えてみれば、子の名前をつけるにあたり、一に準ずるとするわけがない。なるほどと思った次第である。

本年は三月十九日に、上期の会合を開いた。場所は市ヶ谷の某会館のお座敷。昨年暮と同じく十七名が集った。例年五、六月の頃に行うのだが、級友二名が花の東京をあとに、三月一ぱいで故郷静岡に帰るといので、繰上げて開催したのである。いつものことながら、こういう会合は楽しい。そして静岡県人は人柄がよく、自分のことより人のこと、人の立場を尊重する気質だということをつくづくと感ずる。

六四回

毎年「一年一回逢いましょう」ということで、七月七日の七夕祭りに開催される六四期在京同期会は、もう十数年間続く恒例の行事になっているが、今年は特別に二

月二二日に開かれた。というのは同期の藤田栄君（前静岡新聞編集総局長）が自民党公認で参議員議員静岡地方区候補として立候補することになり、その激励のために急遽同期会を開くことになったものである。会場は例によって例のごとく新宿「今佐」。当夜出席予定の藤田栄君は急に下田で支持者の会合が開かれることになり、残念ながら出席できなくなったが、その代りに河村勉君、秋山義明君（外科医院経営）近藤昭蔵君（洋服店経営）山下啓也君（勇気屋）らが、わざわざ静岡からかけつけ二十六名の出席を得て盛会であった。開会の挨拶を野沢正憲君（株式会社富士越社長）が力強く述べ岩本吉雄君（岩本プレス工業社長）の乾杯の音頭で宴会にうつった。渡辺素夫君（トビー工業株式会社）の軽妙なユーモラス司会のもとで当日出席の全員から藤田栄君に対する友情溢れる激励の言葉が述べられた。会が盛りあがるにつれ、藤田君を支援するために藤田後援会に対する資金カンパと後援会会員の獲得に協力することが提案され、その場で三十数万円の浄財が集められ近藤昭君に寄託された。また当夜出席の佐々木一夫君（元静中野球部投手）より静高

野球部の選抜野球甲子園出場が報告され、これについてもカンパが集められ。川村勉君を通じて野球部後援会に寄せられることになった。静高校歌、応援歌を全員で合唱して散会。二次会は鈴木明朗君（三井信託本店調査部長）を中心に不二高女出身の美人ママの経営する歌舞伎町のバー「嬢」で、深夜まで別れを惜しんだ。

（名波倉四郎）

七〇回

卒業以来二六年有余、皆々様方にはそれぞれの分野で御活躍のことと思います。私事も防衛大卒業後、若干の部隊勤務と大学院研修期間を除き、大半の期間を陸上幕僚監部の幕僚として勤務し、現在はオペレーションズ・リサーチ・グループ（ORG）のチーフとして微力を尽くしております。

同窓会幹事より防衛問題に関する事でも書けとの御指示を戴きましたが、とてもその器ではありませんが、OR Gで実施している仕事と悩んでいる事柄の一部を紹介させていただきます。

御存知のこととは思いますが、ORは第2次大戦下、ドイツによる英本土爆撃に対処する防空網の適正な構成およびUボートによる

船団攻撃にたいする対策等を検討するために集められた学際的チームが確立した問題解決の方法論です。戦後これは一般企業等が抱える諸問題を解決する有効な方法論としても認められ、軍事ばかりでなく企業等の種々の問題に適用されています。

防衛庁でもORGの必要性が認知され、昭和三〇年以後逐次その機能が強化され、現在では各種条件下における防衛構想の検証、防衛力整備計画（新聞で話題になっている中期業務見直し）や防衛計画の策定に資する分析評価を主要な仕事としています。

これらの仕事は全て、限られた予算等の制約下で、いざ鎌倉という時に国土防衛に役立つ自衛隊の力を、近代戦の様相を十分に考慮しつつ、合理的かつ効率的に維持増強しまた行使することを狙いとするものです。

合理的かつ効率的な計画案を求めるためには自衛隊の力（戦力）を評価する方法論を確立することが大切であり、OR Gがもつとも力を入れている分野です。戦力は精神力2と兵器のパフォーマンス1の割合で構成されるといったナポレオンの戦力論を振り回す時代ではないと信じています。

建築設計・管理

株式会社

ユニオン設計センター

代表取締役 成岡英彦 (67回)

一級建築事務所登録7425号

東京都新宿区西新宿7-1-9 規格ビル
TEL 03-363-8604 (代表)

総合広告代理店

株式会社 ア ド プ ロ

代表取締役 朝比奈正三 (67回)

東京都中央区銀座6-11-20 黒親ビル3階

TEL 03-572-2431 (代表)

戦力といいますが、政治、経済

致します。

陸幕防衛部（一等陸佐）

（広瀬直記）

八一回

現在、静高のバレーコートがある場所は、昔は県営住宅があり、小学校三年生頃までそこにおりました。当時から私は野球が好きで、学校から帰ってくると、静高のグラウンドで野球ばかりしていました。静高の野球部は強く、毎年のように甲子園に出ていました。練習も毎日暗くなるまでやっていて、その練習を私は遠くでいつもみていました。

戦力（国力）を正確に把握せずに戦争に突入した軍および国の末路は実に悲惨であることを歴史は証明しております。最近における国際環境の変化に伴う防衛に関する議論は実に活発であり、国防の一端を担う我々にとっては大いに励みになると同時に、以前にも増して戦力評価の方法論を確立することの重要性を感じています。

国防は自衛隊のみの専有物ではなく、日本国民全体の問題であるとの御認識の上で、前記の戦力評価に関する事柄ばかりでなく、我々が検討すべき問題についての御意見を戴きたく、貴重な同窓会誌の一部をお借りして、あえてお願いする次第です。

同窓諸兄の益々の御発展を祈念

現在、静高のバレーコートがある場所は、昔は県営住宅があり、小学校三年生頃までそこにおりました。当時から私は野球が好きで、学校から帰ってくると、静高のグラウンドで野球ばかりしていました。静高の野球部は強く、毎年のように甲子園に出ていました。練習も毎日暗くなるまでやっていて、その練習を私は遠くでいつもみていました。

私が静高に入学した時は、もう県営住宅はなくなって、バレーコートになっていました。野球部は相変わらず強く、三年間の在学中二回甲子園に応援に行きました。高校時代は野球が出来なかったもので、大学へ入学するとすぐ硬式野球部へ入部し、予科の二年間は授業をサボってランニングやキャッチボールに精を出しました。

学部三年で主将の時、医大リーグで十年振りの優勝、学部四年の盛岡での東日本大会でも優勝する事が出来ました。

卒業して、第二外科へ入ってからも、相変わらず野球とは縁が切れ

ず、院内対抗の監督兼内野をしております。こちらの方は残念ながらまだ優勝は経験していません。

三位が最高成績ですが、今年も一回戦は栄養科に七〇で快勝しました。そういうわけで、静高が甲子園に出ている時は診療もそこそこTVの応援にかけつけます。今年の夏もぜひ勝利の校歌を聞きたいものです。

私は現在慈恵医大第二外科にありますが、我が教室は、消化性潰瘍（胃瘍潰瘍、十二指腸潰瘍）について永年研究しています。私の研究テーマも十二指腸潰瘍の病理を中心に行っていますが、最近やまとまってきた。同じ研究班では、イヌやラットに酢酸やホルマリン等を使って胃に潰瘍を作り、その治癒過程を研究しています。いわゆる実験潰瘍です。

水浸拘束負荷といって、22℃前後の水の中にラットを首だけ出してしばらくつけておきますと、五時間位で胃に、いわゆる急性のストレス潰瘍が発生します。この時の胃粘膜血流や胃粘膜変化を同時に観察するわけです。先日、富士中央病院で実際にあった話ですが、釣りに出かけ、舟が故障してしまい転覆し、舟べりに十時間つかまってやっと助けられた人が、吐血

をして運びこまれました。緊急内視鏡をしてみますと、胃に見事にストレス潰瘍が出来ており、人間でもラットでも同じだなあと皆で話しあいました。余談ですが、この人は手術をしないで退院し、現在経過観察中です。

医局に入ると地方への出張がありますが、教室の出張病院は、幸いな事に静岡県に2つあります。富士と清水ですが、出張に出た時は、故郷に帰ってきた気楽さか、忙しいながらも楽しい毎日です。先日、同級の高山君から連絡があり、何でもよいから書いてくれと云われ、いざ書き出してみると、まったくまとまりのない文章になってしまいました。まだ当分は大学におられますので、同窓諸兄の皆さま、何かありましたら、どうぞ連絡して下さい。お役に立てればと思います。（田村茂樹）

ゴルフ

第八回叩高会ゴルフ大会
開催日四月十六日（水）

場所東名CC

優勝 川上剛二氏（67期）

準優勝 望月祐言氏（71期）

第三位 奥沢徹氏（59期）

参加総数 十六名

内科・外科・整形外科・皮膚科・放射線科
人間ドック

ねつ かん
熱 函 病 院
院長 小 坂 博 (67回)

住 所 熱海市春日町12-2
TEL 0557-83-3131

アクセサリースペースと憩いの空間
各種ギフト・ゴルフの商品・記念品

サロン・ド・グリーン

土 屋 晃 康 (67回陸上)

東京都新宿区西大久保 3-10 プラザ新大樹ビル
(明治通りと大久保通りの交差点)

TEL 03-204-1251・1371

その後の同窓会活動

○五四年一月二三日 幹事会

トッパンムア社会議室にて。

会長以下四〇名、議事次の通り。

一、五四年度のまとめ。奥野副会長より報告された。

二、五五年度新年会の件審議。

一月二三日六時より築地スエヒロにて、会費四千元以下とし細部は事務局に一任された。

三、会報八号配布。各期幹事に発送が依頼された。

四、学生会費の件。

事務局より学生会費を半額とする案が提出され審議可決された。

○五五年一月二三日 新年会

恒例の新年会が築地スエヒロに於て六時から開かれた。この日三八回の石割先輩を始めとして四六名が集り新年を祝った。中でも女性会員五名が新春の装いも美しく人気を集め、和気あいあいの盛会であった。

○二月二一日 幹事会

トッパンムア社会議室にて。

会長以下三六名、議事次の通り。

一、年会費拠出状況。別掲の通り

二、同窓会規約検討委員の件

当会委員として柳川副委員長と月見里幹事長が委嘱された。

三、母校野球部選抜大会出場の件

四三回田崎氏より、応援資金に

ついては後援会に手持資金があるので募金を行はないであろう、又

募金で行う場合は百年祭方式がよいとの意見が出され了承された。

四、五五年度総会の件

事務局より提案され、六月二〇

日六時より、築地スエヒロ、内客例年通り、会費五千元、但し、学生二千元とし、細部は事務局に一任された、

五、五五年度行事について意見交換され、更に活潑に行う様申し合はされた。

○四月一六日 ゴルフ会

明細別掲の通り。

○四月二三日 幹事会

トッパンムア社会議室にて、会長以下四七名、議事次の通り。

一、五五年度会計及同監査報告、奥野副会長より会計報告、村松監事より監査報告を行ない承認された。

二、総会準備について奥野副会長より報告、案内状発送依頼。

三、会報及名簿関係事務連絡。

四、関東同窓会旗披露。

予て製作中であつた会旗が出来上り、担当の59奥沢氏より披露された。

54年度会費納入状況

期	会員数	状況	期	会員数	状況	期	会員数	状況	期	会員数	状況	期	会員数	状況
20	3	2	37	8	3	52	35	22	69	90	34	84	7	0
22	3	3	38	11	6	53	41	23	70	107	51	85	10	1
23	1	1	39	5	1	54	37	21	71	70	36	86	4	1
24	1	1	40	19	8	55	38	27	72	41	16	87	4	0
26	2	1	41	17	9	56	36	14	73	105	28	88	5	0
27	3	1	42	37	22	57	53	34	74	14	6	89	11	0
28	4	3	43	27	16	58	51	22	75	46	7	90	11	0
29	3	3	44	29	16	59	66	30	76	31	6	91	11	0
30	1	0	45	23	16	60	40	21	77	94	23	92	10	1
31	2	2	46	36	19	61	49	21	78	36	9	93	3	0
32	4	1	47	31	24	62	63	48	79	50	13	95	15	15
33	4	1	48	31	21	64	65	39	80	8	2			
34	9	5	49	31	15	66	59	43	81	75	16	計	2062	888
35	8	3	50	21	11	67	71	38	82	17	2			
36	7	2	51	40	19	68	86	37	83	17	0			

建築設計・監理

株式会社 奥野建築設計事務所

取締役会長 奥 野 孝 (53回)

取締役社長 奥 野 進 (56回)

取締役副社長 吉 川 善 吉 (56回)

本 社 東京都台東区寿2-5-12 加瀬ビル

TEL 03-842-6831 (代表)

静岡事務所 静岡市安東2-8-14

TEL 0542-46-9378

建築コンサルタント・設計施行业務

建築に関する御相談は御気軽に……

株式会社 大 雄

取締役社長 奥 野 孝 (53回)

取締役営業部長 奥 野 広 (58回)

本社 東京都台東区東上野2-18-7 共同ビル10階

TEL 03-834-5331 (代表)

編集後記

今回の会報九号は前号同様新聞形式の各期日より中心で計画しました所、始めて見ますと各期からのお便りがどうも少い。反面御覧の様な立派な原稿を沢山頂きました。特に芹沢氏(43)からは、表紙無しの形としたのは台所の事情だろうとのお心遣いで多額の御寄附まで頂き委員一同大感激でした。それやこれや考え合はせ、相談の結果、今回は元の表紙付スタイルとなりました。

皆様の御感想如何でしょうか？
お便りをお待ちして居ります。

なお、今号は広告を記事の中へ掲載しました。会報の広告は同窓生に対して健在と仕事に頑張っていることを知らせる上でよい手段だと思います。願わくば、一期に偏らず各期にわたって万遍なく掲載され、各期消息連絡の一助にもなれたと思います。

掲載料は一回一万円です。どうぞご利用下さい。(月見里記)

会報(第九号)

昭和55年6月20日 発行

編集人 月見里得知郎

発行所 静中・静高

関東同窓会

印刷所 庵原印刷所